

## 東京大学電気工学科の工部大学校関連図書(1)

工2号館図書室 滝沢正順  
takizawa@mech.t.u-tokyo.ac.jp

東京大学電気工学科で所蔵されてきた図書の中には、明治時代の工部大学校の旧蔵書や卒業論文がある。また工部省鉱山阿仁分局の印が押された図書も含まれていて、死去した電気工学科卒業生を記念した寄贈図書である。

### (1) はじめに

工部大学校に関係する図書のうち、東京大学電気工学科が所蔵してきた図書について少し報告したい。

なお、2018 年度現在の学科・専攻の名称は電気電子工学科・電気系工学専攻であるが、以下に報告する図書がよく使われ、また学科名の期間が最も長かったのが電気工学科なので、本稿では電気工学科と表記する。

また、2006 年 4 月に工学系研究科・工学部の専攻(学科)図書室を組織上統合して「工学・情報理工学図書館」が発足しているが、それ以後工学・情報理工学図書館の各号館図書室にある備品図書の所蔵は、名義上、専攻(学科)でなく工学・情報理工学図書館のものとなった。そして備品でない資料(備品番号がなく大学の資産としての登録がない資料)、たとえば消耗品図書あるいは卒業論文や修士論文等は、学科(専攻)のもの、というように区分されているが、本稿では以下に報告する図書が最もよく使われた時期の形で「電気工学科の図書」という形で表記する場合がある。

### (2) 工部大学校・工学寮旧蔵書

工部大学校(以下この校名になる前の工学寮も含める)が所蔵していた図書には蔵書印や蔵書票があつて旧蔵書であることが分かる。最も多く所蔵しているのは、当然ながら東京大学の筈である。数量が多いのは工学部の筈であるが、それ以外に総合図書館、駒場図書館、生産技術研究所図書室が所蔵している。

生産技術研究所は第二工学部(1942 年ー1951 年設置)の後身であるが、第二工学部が発足する際、第一工学部(千葉市に設置された第二工学部の設置期間中、東京・本郷の工学部は第一工学部と改称)から蔵書が分けられているが、その中に工部大学校旧蔵書が含まれているようである。

2011 年に電気系保存書庫の配架図書をオンラインで所蔵検索できるように遡及入力をした際(図書は東大総合図書館に運んで総合図書館で入力)、例外的に電気系の帳外本(大正 12 年の関東大震災以前の受入図書)を遡及入力してもらえらることになり、入力していただいた。(ただし帳外本の全部は入力できていない)

その際に東大 OPAC の検索項目に「文庫区分」があることを思い出し、

- ・工学寮旧蔵書
- ・工部大学校旧蔵書
- ・帝国大学工科大学書房旧蔵書

の 3 つの区分を新設してもらい、該当書について区分を入力していただいた。

これにより電気工学科のものに限らず、上記 3 つの区分について、所蔵している学内図書館室の名称と所蔵数が東大 OPAC で検索できるようになった。

ただし検索できるのは、あくまでも上記区分が入力されたものだけであり、まだ工学部以外の部局の図書館室では入力されていない。2018 年 12 月現在 OPAC で検索すると所蔵数は次のようになっている。

	図書室名： 工 2	工 1A	工 3
・工学寮旧蔵書	51	35	1
・工部大学校旧蔵書	96	78	8
・帝国大学工科大学書房旧蔵書	122	59	5

上記の所蔵数のうち工 2 号館図書室の分は電気系保存書庫だけでなく、機械系保存書庫の分も含んだ数である<sup>(1)</sup>。ただし帳外本の全部がまだ入力されていないのは機械系も電気系と同じである。私は以前に機械系図書室の明治 30 年以前の単行本の時期(校名)ごとの冊数を数えてみたことがあるが<sup>(2)</sup>、そのときの冊数が正しいかどうかは機械系の帳外本が全部 OPAC に入力されてみないと分からない。

工学寮・工部大学校の旧蔵書はすべて帝国大学の蔵書印も押されている。明治 19 年の帝国大学発足時に押捺したようである。

帝国大学工科大学は工部大学校と東京大学工芸学部(東京大学法理文三学部の工学系の部分を改組して短期間設置)が合併してできたものだが、東京大学三学部やその前身の開成学校の旧蔵書には帝国大学の印は押されていない。

また工部大学校も東京大学三学部(含・前身校)も、図書(含・製本雑誌)の現物に備品番号は付されていない。

備品番号は明治 19 年の帝国大学発足以後に受け入れた図書(含・製本雑誌)から、本の現物に付されている。部局に関係ない全学で一連の番号のようである。ただし大正 12 年の関東大震災で附属図書館の図書原簿が焼失したため、以後「帳外本」となった。関東大震災以後は部局ごとの番号で備品番号が新しく採番されている。

工部大学校(含・工学寮)旧蔵書は、東京大学以外では内閣文庫が所蔵。ほかに国立国会図書館にもあるようである。

また、九州大学蔵書印データベースをオンラインで検索すると工部大学校の蔵書印が出てくるので、所蔵しているようである。

それ以外に、東北大学所蔵の夏目漱石旧蔵書の中に工部大学校旧蔵書があり、漱石が古書店で購入したもののようなものである<sup>(3)</sup>。

古書店での購入としては、英文学者の平田禿木と上田敏が(東京)帝大前の古書店で工部大学

校旧蔵書を購入したことがあるという。禿木の所蔵になった本には工部大学校と一高（第一高等中学校？）の蔵書印、それに「第一高等中学校消印」が押されているという<sup>(4)</sup>。

工部大学校の旧蔵書としては、工部大学校の卒業論文も旧蔵書に含められるかもしれない。工部大学校があつた当時の蔵書数の表では、卒業論文の冊数も蔵書数にカウントしているからである。

工部大学校の卒業論文は電気（電信）、機械、建築（造家）の各学科のように完璧に現存しているものと、土木のように全く現存していないと思われる学科とがある<sup>(5)</sup>。現存する工部大学校の卒業論文はすべて英文である。

ちなみに、東大工学部（工科大学）の卒業論文は大正時代の途中から日本語のものにかわり出し、それ以前はすべて英語で書かれたと私は思っていたのだが、すでに大正の早い時期に一部は日本語で書かれたようである。というのは大正 2 年発行の『赤門生活』という本の工科大学の部分に卒業論文について、

「用語は外国語で書くを要する科が多く、邦語で書く科もあるが其れは極めて少ない。工科学生 of 智識が統括されて纏つたものになるは此卒業論文に負ふ所多大である。其れだけ学生は此論文に対しては熱心に筆を執るのである。」

と書かれているからである。（南北社編・発行、105—106 頁）

### （3）阿二分局印

電気系保存書庫にある N.E. Spretson 著『A practical treatise on casting and founding : including descriptions of the modern machinery employed in the art. 2nd edition』という本には、「工部省鉦山阿仁分局」の印が押されている（E. & F.N. Spon、1880 年、現在の資料番号 1011595657、請求記号 G:2）。

この本には工部大学校・工学寮の印や蔵書票はなく、工部大学校旧蔵書ではないと思われるが、関連としての意味はあると思うので報告する。

阿二は秋田県の阿仁鉦山であるが、この本は秋田県にあつたのか東京の工部省にあつたのかは不明。「工部省鉦山阿仁分局」の印影は『改訂増補版・内閣文庫蔵書印譜』141 頁にも掲載されている（国立公文書館、1981 年）。

機械系保存書庫の工部大学校旧蔵書の中に、「工部省図書印」が押された図書があつて、「工部省図書印」には朱で上からバツ印が書かれ、鉛筆で「From Kobusho」という移管時のものかと思われるメモも書かれているが<sup>(6)</sup>、この阿仁分局の印の図書には消印や払い下げ等を示す書き込み等は何もない。

東大 OPAC のこの本のコメント欄には「「工部省鉦山阿仁分局」印あり」と記入した。本に押された東京帝大附属図書館のスタンプによれば大正 9 年 9 月 28 日登記の備品図書。関東大震災以前なので図書原簿は残っていない。

この本には「橘川太郎氏寄贈、故工学士橘川源吾氏記念図書」という東京帝国大学附属図書館の書票が貼られている。また「故工学士橘川源吾君記念図書印」が押されている。書票は「氏」であるが、印のほうは「君」である。おそらく橘川源吾旧蔵の本だったと思われるが所蔵の経緯は不明。記念図書の本は他にもある筈だが未確認。

寄贈者の橘川太郎は源吾の子息である。橘川源吾逝去時に新聞に死亡広告が出されていて、それによって子息であることが分かる。東京朝日新聞の大正 7 年 1 月 22 日から引用する。

「橘川源吾儀永々病氣之处本月二十日午後二時死去致候間此段辱知諸君に御通知仕候、追而葬儀は途中行列を略し来る二十三日午後二時青山斎場に於て仏式を以て相営み申候、大正七年一月二十一日、嗣子 橘川太郎、親戚 橘川司亮、総代 田代進四郎、友人代表 工学博士中原岩三郎、平岩良治、丸山莠三」

橘川源吾は 1901 年(明治 34 年)7 月東京帝大電気工学科卒業。電気系保存書庫に英文の卒業論文と実習報告の現物があり、工 2 号館図書室で閲覧可能。題名は東京大学学術機関リポジトリ(UTokyo Repository)で現在検索できる。故工学士橘川源吾「君」記念図書印が押された記念図書の選定には、死亡広告に名前がある人たちも関係したのではないだろうか。

電気協会が昭和 7 年に発行した『電気協会十年史』を見ると、385 頁から「電気界先賢頌徳祭」の記事がある。この中の第 2 次電気界先賢頌徳祭(昭和 5 年 5 月)で頌徳された「電気界先賢霊位」の一人として橘川源吾の名があり(398 頁)、東京電灯株式会社発電課長と書かれている。この東京電灯株式会社発電課長がおそらく生前の最終ポジションだったと思われる。

#### 註

- (1) 機械系保存書庫の分は総合図書館でなく、工学・情報理工学図書館(工学系・情報理工学系等情報図書課)による入力である。
- (2) 滝沢正順「明治時代の蔵書のことなど」、『図書館の窓; 東京大学附属図書館月報』vol.29 no.10、1990 年 10 月、101-102 頁
- (3) 佐々木靖章編『夏目漱石蔵書(洋書)の記録 : 東北大学所蔵「漱石文庫」に見る』増補改訂版、てんとうふ社、2008 年、38—39・205 頁
- (4) 小川和夫「平田禿木から福原麟太郎への手紙」7、『学燈』第 80 巻第 8 号、1983 年 8 月、30—31 頁
- (5) 滝沢正順「明治時代の東京大学工学部の卒業論文について」、『東京大学工学部・工学系研究科技術発表会技術報告』、第 17 回、2002 年、107-116 頁
- (6) 滝沢正順「明治時代前半の東京大学工学部蔵書の蔵書印と蔵書票」、『東京大学工学部・工学系研究科技術発表会技術報告』、第 18 回、2003 年、81-84 頁